

真の電子情報による 電子情報通信学会を目指して

編集理事 山中直明



2013年11月1日、昨年転職して世界のトップ企業××株式会社のSEとして働く山中は、通勤の電車の中でタブレットを開いた。「新着情報」：電子情報通信学会誌11月号。「あっそうだ今日は学会の11月号の配信日だ。」クリックすると、新しい記事がある。普段は読み飛ばすことも多いが、タイトルが面白そうなので巻頭言を開いた。電子情報通信学会会長の井上友二さんの巻頭言だ。「プレイ」を押すと動画像で流れ始めた。「相変わらず元気な人だな…！」次に、解説記事を読む。読んでいると所々で、動画像やWikiの説明、電子情報通信学会の関連ある論文がポップアップして紹介されてくる。もちろんマルチランゲージ対応なので、その場で英語を翻訳しながらでも楽しめる。

学会のページで最も充実しているページでもある“インターネットエデュケーション”を開く。今目指しているのは「データサイエンティスト1級」である。これはなかなか難しいが、今の会社で部長になるには必要だ。15回の動画像とテキストが見られるチュートリアルを受けてWebtestを受ける。実は、このチュートリアルを受けていると、右側によく転職の案内が入る。これからはこの分野の人材が欲しいのだろうか？ この分野の社会人教育では、電子情報通信学会が最も権威がある。何しろ、超有名大学教授が教えるだけではなく、ビジネスの最前線のVP（副社長）が教えてくれる。一つの大学ではできない教授陣だろう。日本中の大学と企業をトピックスで横切りしたようなものである。これも、学会の最も大切にしてきた“研究会”のコミュニティのおかげであろう。“インターネットエデュケーション”はいわゆる単なる教養や資格だけでなく、大学院科目のクレジット（単位）も取れる。商学部を出たのだが、この単位を利用して、慶應義塾大学の理工学研究科の修士号も僅か1年で取れた。ダブルメジャーのダブルデグリーは、企業ではとても競争力を発揮してくれる。今度はメディアデザインの博士を取りたい。従来の教育システムでは考えられないことで、日本の競争力の源泉だと思う。

今日は学会のIEICE LinkedInを使って、現在取り組んでいるシステム開発を助けてくれるソフトウェア技術者とテレコンの予定だ。彼は自分の仕事と別に時間に余裕があるときに、アドホック的にプロジェクトに参加しているようだ。いろんな仕事を自由にできて楽しいと言っていた。新しい仕事のスタイルだろう。我が社のアウトソーシングソースは、このIEICE LinkedInの人脈に大いに依存している。以前は電子情報通信学会の会員数が減っていると聞いたが、生涯教育とキャリアアップのため、更には学会というコミュニティのSNSを使った人脈の活用により会員数は増加しているらしい。自身もこれがなければ、今どのように仕事をしていたかも想像できないくらいだ…。

もちろんこれは全くの妄想である。会員数は一時のピーク4.2万人から3.3万人に減少し、今年の前算は1.5億の赤字である。今でも、この原稿に学会の編集は赤鉛筆で修正を忙しくやっている。論文を中心とした研究者の発表の場の提供だけではなく、業界全体の強いコミュニティを作ることが望まれている。そのためには、電子情報通信学会の名のとおりの最新のIT技術をフルに活用した、むしろ、技術のテストベッドのような学会が必要である。論文発表のみでなく言われて久しい「生涯教育」「キャリアアップ」のための組織、いわゆる“広い意味での学校”になる必要があるのかもしれない。コミュニティを強化し、就職や転職、更に仕事を協力して行うような学会。一つでも二つでも実現させねば、電子情報通信学会が率先してやらねば、日本は変わらない。